

ケネディ大使への手紙

靖国と従弟の君の『特攻』をめぐつて



「立場の違いについて正直に話し合つ」ことの大切さを認めていらっしゃる大使へ。――日本人として伝えたい幾つかのこと

文藝評論家・おがわ・えいたろう

小川 榮太郎



ケネディさん、日本大使就任おめでたうございます。今、日本はやうやく、二十年近くのデフレと内向き志向から脱却し、「善をなす強い日本でありたい」と宣言する安倍首相を得て、力強く世界に向けて水進し始めたところです。

安倍政権の一年で日本の空氣は本当に一変した。これまでの数年、日本は政権の統治能力が疑はれる状況下、「決められない政治」といふ言葉が流行し、国内には諦めムードが漂つてゐた。それが今や、経済、安全保障、外交、教育、オリンピックなど全ての案件がダイナミックに動き始めました。丁度日本がさうなつたその時に、私はあなたの就任を心から歓迎したい。その理由は幾つもあります。

人織田信長は、十六世紀の戦乱の世を平定した武将ですが、同時に、当時の日本に世界でも先駆的な市場経済的発想を導入した合理主義者です。人材登用も身分や出自に拘らなかつた。ヨーロッパとの交際にも非常にオープンでした。フィギュアスケートの世界的な選手だつた織田信成さんは彼の子孫です。

天皇を頂きながら、自由で果斷な織田信長のやうな人材も輩出する。――高貴な家系とチャレンジャーのどちらをも大切にする日本人から見ると、若い国アメリカの中で、二十世紀を通じ、アメリカに最も影響を与へてきたケネディ家は、強い尊敬の対象です。しかも、ケネディ大統領は、世界史へのチャレンジャーであり、民主主義を新たに定義づける大きな存在でした。次に、あなたを歓迎する理由、それはあなたが自由な議論を率直に受け入れる勇気を持つてゐる事です。

今年の一月二十三日に朝日新聞に掲載されたインタビ

ューを、私は大変興味深く拝読しました。その中で、特に目を引いた一節がある。安倍総理の靖国神社参拝に対し失望したとした大使館の談話について質問され、あなたはかう答へてをられる。

「強固な関係の特徴は、お互いの立場の違いについて正面に話し合えることです。」

そしてまた、イルカの追込み漁に反対するツイートに多くの賛否が寄せられたことについて「この問題では賛否両方の返信がありました。とても健全なことです。他の課題でもツイートすることは重要でそこから会話が始まれば良いと思います。」と話されてゐる。このやうに自由な議論を呼びかけるあなたの姿勢は、いはゆる外交のプロにはかつて打ち出せないものでせう。アメリカの民主主義の伝統の中核を生きてきたといふあなたの伸びやかな誇りが、自由な議論への率直な呼びかけになつてゐる。

かうしたやり取りを見て、私は、ふと、安倍総理夫人である昭恵さんを思ひ出した。

彼女は総理の政治的立場を理解する一方、原発問題などでは相反する議論でも、敢へて問題提起しようとすることがある。時には政権与党である自民党の政策に対しても議論を投げかける。そして反対意見に対しても女性らしいしなやかさでこれに応じる。この夫人の自由闊達さと、それをあへて許してゐる安倍首相の懐の深さが、

安倍政権の日本を風通しのよいものにしてゐます。

あなたを歓迎する、より政治的な理由も挙げたい。言ふまでもなく、あなたとオバマ大統領との深い信頼関係です。そしてそのことを象徴するかのやうにあなたはこのインタビューでかう発言してゐる。

「日本は米国にとって、最も価値の高い同盟国、信頼する友人であり、その外交戦略の中心にあります。米国は中国とは建設的に関わりたい。と同時に米日関係は中国の行動によって規定されるものではありません。」

日米中韓の四か国関係が、従来よりも難しい舵取りを要求される今、オバマ氏に近いあなたが、日米の同盟関係と米中関係との相違を明確な言葉で再確認した。これは四か国すべてにとつて小さくない事実です。これは最後にもう一つ、あなたが文学を愛することが、私は大変嬉しい。大使就任直後も、あなたは早速スピーチに日本の古典を引用してくれた。

川の流れが絶えない、しかし川はその場にある。

これが十三世紀の日本の最も有名なエッセーである『方丈記』から取られたのではないかと、我が国ではだいぶ話題になりました。

可能なのもその通りです。しかし日本において靖国問題をはじめとする先の大戦に関する歴史認識は、率直に話してはいけないテーマになつてしまつてゐる。その実情をまづ知つてほしい。

言論空間そのものが歪んでゐるのです。

例へば、日本において安倍首相の靖国参拝がどう報じられたか、ご存知でせうか？

世論調査では参拝の是非は均衡してゐた。中韓を刺激するから行くべきでないといふ意見も多い一方、両国が干渉への拒絶も多数意見でした。靖国参拝が問題化したのは近年のことで、戦後四十年それは何ら問題ではなかつた。従つて、日本には賛否両論拮抗しつつ、様々立場の議論が存在する。

ところが、日本の報道は、安倍氏の参拝への国内外の反対意見のみを並べ立てました。12月29日のTBSサンデーモーニングといふ、日本を代表する政治ショートは、ター全員が、安倍氏の靖国参拝を批判した。稳健派とされるニュースキャスターの代表的存在、池上彰氏の番組（1月13日 テレ朝 池上彰の学べるニュース）でさえ、この件について、安倍外交の国際孤立を強調し、靖国参拝の意義や好意的反応は一点も紹介しない。そもそもこれらの報道は安倍首相が、参拝に際して発表した「恒久平和への誓ひ」といふ非常に中身の濃い、重要な

原文はかうです。

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。

日本には千八百年程遡ることのできる、詩歌の伝統があります。歴代天皇は皆詩人であり、彼らの多くは歴史に残る名歌を残してゐる。逆に、農民や兵士さへ、同じ形式の詩、つまり和歌を古代から詠んできました。日本人は身分を越え、男女の別なく、古来、和歌といふ形式に喜怒哀樂を込め、それによつて絆を深めてきた。私自身、政治学者ではなく、文藝評論家です。あなたの文学愛好が嬉しくないはずはありません。

靖国参拝を議論する前提として

その上で申し上げたい。

まさにあなたが仰つた自由な議論がこれほど緊急性を要する主題は他にありません。首相の靖国神社参拝といふ問題です。

あなたはこの問題について、昨年末に続き、一月のインタビュー記事でも「失望」の表明を繰り返された。そして「強固な関係の特徴は、お互いの立場の違いについて正直に話し合えることです」、だから、率直に言ふのだと仰つた。

率直な議論が大切なのも、強固な友情があればそれが

公式見解に全く触れてゐません。そして、靖国問題で率直な議論をしようとする人間には右翼といふレッテルを貼つて、「率直な議論」を、国民や世界の世論の眼から覆ひ隠さうとする。

率直な議論から日本は逃げるな。——ニユーズウイーク日本語版の靖国神社特集号（2014・1・28号）は、この靖国参拝について、中韓の抗議が如何に欺瞞に満ちたものかを公正に指摘すると共に、日本側も、「国民的議論や説明を抜きにして、事を進めようとしている」と批判してゐる。全くその通りです。ただ、今書いたやうに、メディアが、右翼といふレッテル貼りに終始し、「率直な議論」を隠蔽してゐる以上、政治家が「率直な議論」を發しようものなら、中身は伝へられず、右翼呼ばはりで社会から抹殺されかねません。かうした圧倒的に歪んだ言論空間の中で、例外的に己の信念を主張することに成功してきたのが安倍晋三氏なのです。それが今度の靖国参拝となつた。

どれだけ多くの国民が安倍氏のさうした在り方に感動を覚え支持してゐることか。

安倍政権発足から一年経つて、内閣支持率六〇%といふ数字は、日本の政治史で初めての事です。ケネディさんには、まづはさうした日本の実情を知つておいて頂きたいたいと思ひます。

次に、靖国問題について、率直に議論したい第二の

点、それは、この参拝は靈性に關はることであつて、本來外交問題にすべきではないといふ事です。いささか突飛な喻へを許して頂きたい。

イエスの処女懷胎を外交問題にしていいと思ひますか？

もし、ある国が、アメリカに対し、「イエスの処女懷胎のやうな非合理な事を信じてゐる非合理な国とは、外交も軍事も共にできない。取り下げるもあらひたい」と外交問題化を繰り返したらどうなるか。

信仰生活は、長年の習慣、伝統の上に築かれた世界です。非合理と合理は分ち難く結びつき、その文明の内部にゐる人間には自然でも、異文明の人間には理解しがたい場合がたくさんある。だから、不用意に互ひに触れてはならない。異文明の人間には想像もつかない、従つて防ぎようもない誤解が必ず伏在するからです。

これが、欧米が多年の宗教戦争の歴史に反省し、十九世紀以降到達した新しい世界観ではないのか？

靖国参拝の本質は、死者慰靈といふ、宗教問題なのです。そのやうな問題を外交化してはならない。我々は、中韓に対してもアメリカに対してもそのやうなルール破りを一度もしてゐません。

「許しと共存」の文化への理解を

神宮と並び、出雲大社を大切にしてきた。我々は、基本的に許しの民族、共存の民族なのです。靖国神社の場合も、その中に鎮座されてゐる鎮靈社は、戦争や事変で亡くなられ、靖国神社に合祀されない国内、及び諸外国の人々を慰靈してゐます。

今回安倍総理は、靖国神社だけではなく、そこにも參つた。

確かに、靖国神社は、近代戦争の慰靈の場です。当然古代の信仰と厳密に一致するわけではない。しかし、基本的には、日本の慰靈の精神に脈々と流れるのは、かういふ、許しと共存であり、靖国神社の嚴かな境内に立たれば、あなたも必ずそれを感じられる筈だ。

ナチスのホロコーストと日本の戦争行為は絶対的に異なる

では、さうした靖国神社が、なぜ問題化してしまつたのか。現在、中国と韓国が軍國主義復活などといふ、実情と全くかけ離れたプロパガンダで、総理の靖国参拝を非難しますが、その最大の根拠はA級戦犯を祀つてゐることだといふ。

確かに、祀られてゐる。しかし、それは、二百四十六万六千人以上の戦歿者の内の一人として祀られてゐるといふことだ。戦争遂行に直接責任ある者を取り立てて

かうした一般論を踏まへた上で、首相の靖国神社参拝といふ行為の意味について、少し丁寧にお話しします。そもそも靖国神社は我が国の近代史と共に始まつた、戦死者を祀る慰靈施設です。神道の信仰に基づいてゐる。神道では人は死ぬと神になる。ただし、神＝GODではあります。A級戦犯をGODとして祀つてゐるといふ国際社会の一部にある誤解は余りにも実情と懸け離れてゐる。カトリックにおいてもミサによつてあらゆる人の原罪が、洗ひ清められ、神に許されるといふ儀式があるでせう。その条件や構造については、当然、大きな隔たりがあるが、しかし死者が穢れから許される、さういふ意味ではそれと同じだと考へて頂いて間違ひはない。

その意味で、現実政治としての戦争と、それが終はつた後の慰靈が別の次元の営みなのは、日本と欧米とに現在共通する価値觀ではないでせうか。

また、我々には敵の為に祈りを捧げ、敵の為に神社を建て、祀るといふ伝統もある。古代日本を統一した大和王朝は、その前の王朝を滅ぼさず、都から遠くに封じ込め、彼らの信仰は、そのまま許しました。それが出雲大社です。この事績は、我が国最古の歴史書である『古事記』『日本書紀』に出てゐる。そこには、征服や統合や殺戮はなかつた。我々は古くからそれを「国譲り」と呼んできた。そして日本人は、大和王朝の祖神を祀る伊勢

顕彰してゐるのではない。全ての戦死者への慰靈の一部である。これが第一。

第二にA級戦犯といふ言葉が、世界中で独り歩きし始めた。これが私には異常に思はれる。

日本はアメリカ（当時の連合国）と戦争をした。その個々の事績については様々なかつたでせう。特に、真珠湾攻撃において宣戰布告が遅れたのは、日本人の美学に最も反する痛恨事でした。しかし、戦争そのものが間違つてゐたのではない。戦争に理非はありません。近代の戦争は利害の衝突です。

勿論、イデオロギーの戦ひの要素もあるが、それを言ふならば、日米戦争で日本側が掲げた理念は大東亜共栄圏の建設です。この理念が間違つたものとは言へません。軍國主義といふ批判も現実を見れば見当外れだ。戦時に国家総動員体制になつた以外に、国家が軍部に壟断され、外国による強制的な解放を必要とする政情は、当時の日本の歴史をきちんと調べれば出てこない。

中国は安倍首相の靖国参拝をヒトラーの墓参になぞらへますが、全くナンセンスといふ他ありません。確かに、日本は、当時ナチスドイツと同盟中であり、ナチスドイツはユダヤ人ホロコーストといふ重大な人道への罪を犯してゐる。その点でナチスは断罪され、今日でもそれが続いてゐる。これは当然です。しかし、日本はナチスとは違ひ、通常の戦争を戦ひ負けただけだ。戦争中

も、ナチスのユダヤ人抹殺に同調したことは一切ない。

逆に、人道的な見地からユダヤ人を保護してゐる。

戦争に負ける事と民族抹殺のホロコーストとは全く次元が違ふ話だ。同盟してゐたといふだけで同罪のやうにみなされることは遺憾極まりない。

ただ、当時は世界情勢の上からも、日本を徹底的に叩きのめしておくためにも、ニューヨーク裁判に倣つて東京裁判が行はれました。今更無効を言ふつもりはありません。しかし、これはナチスのホロコーストと日本の敗戦を同罪と見る、全くナンセンスな認識に基づく裁判だといふ事は云つておかねばならない。しかも、その事は、数年後の国際社会も認めてゐる。

昭和二十七年サンフランシスコ平和条約が発効し、独立を回復した日本は、生存してゐる全戦犯を国会の全会一致で恩赦し、A級戦犯を含む処刑死した人たち全員を犯罪者ではなく、法務省として死後名誉を回復させた。それを国際社会に通告し、関係国全てがこれを了承した。今に至るまでナチスの残党が徹底的に告発されるのとは全く違ふ。日本は単に戦争に負けただけだといふ認識が当時の国際社会になれば、戦犯の名誉回復が世界中で認められた筈はないでせう。

それを七十年も経つのに、世界中の歴史への曖昧な知識をいい事に、改めて彼らを戦犯として永遠に歴史に刻印しようとするのは、文明から野蛮への逆行でしかな

い。違ひますか。

本来、戦争犯罪は勝者敗者を問はず存在するし、そもそも戦争そのものが残酷で絶対的な悪です。そして、そこまで話を広げるなら、日本断罪には全く意味がなくなるでせう。ここで、あへて中国共产党五十年の人権蹂躪の殺人者数を列記して、逆の言論戦を仕掛けるつもりはない。

その代り、一九四〇年に書かれたケネディ大統領若き日の驚くべき洞察の書『イギリスは何故眠ったか』の中の次の二節を引用しておきませう。

全体主義制度と競争するにあたつて、民主主義の弱点は大きい。民主主義は合理的な存在としての人間に対する敬意に基づいてゐるからだ。

中韓のプロパガンダを許した「お詫びの文化」

靖国批判に限らず、中国、韓国の反日プロパガンダにははつきりしたパターンがある。その事も、日本人としてはつきりお伝へしておきたいと思ふ。歴史認識にまつはる問題での彼らのプロパガンダは、近年どんどん強まつてゐる。殆どの場合、極論だつたり嘘だつたり、もう条約などで決着済みの問題です。ところが、彼らは水面下の交渉で、今回日本が折れればもう二度と問題にしないから折れてくれと云つてくる。日本

が折れる。すると、彼らは「それみたことか、本当に悪かつたから謝罪したのだらう」と世界中に宣伝し、嘘を事実として定着させる努力に全力を傾ける。そして、また、新たな次の問題を作る。そこでも同じやり口で日本に圧力を掛ける。——この二十年、それが日本対中韓交渉の基本的なパターンなのです。

ここに一つ重大な日本の弱点がある。それは、「お詫びの文化」です。曖昧化の文化、先に謝つてしまへといふ文化、本音と建前の使ひ分けといふ文化と言ひ直してもいい。

これらは、古来、日本では、円滑な人間関係の為の智慧でした。

例へば、我々には、人の家を訪問した時、玄関口で「ごめんください」といふ丁寧な言ひ回しがある。直訳すると謝罪の言葉です。訪問によつて、他人の暮らしのリズムを乱すことへの淡い配慮の表現で、謝罪は意識には上らない。我々は、さうした慎みを言葉にすることを礼仪の重要な要素と感じながら生きてきた。だから、日本人の会話は、日常から、無意識の謝罪に満ち溢れてゐる。

人に会ふなり、

「いやあ、すまん、すまん」

何かを人にしてもらふと、有難うではなく、「どうもすみません」「申し訳ない」

数日を隔てて会つた時の挨拶が、「先日は失礼しました」「いや、こちらこそかへつて申し訳ありませんでした」互ひに何も悪いことはしてゐないし、謝罪の気持もない。あなたがたが、道をすれ違ひ様「sorry」といふ、あの何倍も我々の文化は謝罪の応酬に溢れてゐる。

いはば、外交や政治でも、日本人は、この「お詫びの文化」の慣習に引きずられてしまふのです。その延長上で、たとひ相手の主張が正しくなくとも、相手がそれで気持を取めてくれれば認めてしまふ。卑劣な魂胆からではありません。人にはそれぞれ事情がある、さうした事情を察しあひ、よほどの場合はとことんやるが、さうでない限り黒白は付けない。異論や違和感を併存させる言葉で戦ひ抜くなどといふことはしない、それが我々の文化なのです。

しかし、中韓との関係は、結局、それに付け込まれた二十年でした。そして結果を見れば、それは道徳的に負ふ必要のない嘘の責めまで負ふ事になるといふ、堪へがたい屈辱を生じ、世界に間違つた日本像を蔓延させた上、中韓に、嘘のプロパガンダを許すことで彼らの人間性をも侮辱することになつた。

今、日本にとつて一番肝心なのは、中韓に、君たちの誇張と欺瞞に満ちたプロパガンダはもう無効だとはつき

り悟らせることに他ならない。その為に、我々がまづ、外交上では、「お詫びの文化」から脱却せねばならない。私はさう考へます。

公正さと誤解と

ただ、この靖国問題の背後には、もう一つ奥がある。アメリカを含む世界の日本理解の根底に、根強い誤解があると感じる。最後にそれを申し上げておきたい。実は今、私の手元にマクスウェル・テーラー・ケネディ氏の「Danger's War」といふ本がある。ケネディといふ名前からひよつとすると関係ある方かと思つたら、あなたの従兄弟に当る方だ。

日米戦争時のアメリカ空母バンカー・ヒルを死守したアメリカ兵と、逆にそれに特攻攻撃した日本兵、この両者に焦点を当てて、日米攻防戦を詳細に書いた物語です。

驚くほど、両軍の兵に公正で、高潔な本だ。

「通例、歴史書で扱われるのはミッチャーやバークら、戦争の行方を決めた軍の指導者たちだ。しかし、私たちが第二次世界大戦から学ぶべき真に重要な教訓は、戦いに巻き込まれた人々、互いの為に力を合わせて戦つた「普通の」人々の物語の中にあるのではないだろうか。（略）これは、異常な状況のただ中へと放り込まれながら

死を賭して何かを守らうとした精神の劇を裁くのは容易な事ではない。マクスウェル氏は両軍の戦闘の研究を通じてそこに気付いた。

ものであり、その人生が最も強烈な不協和音でぶつかり合ふのが戦争だからです。ある立場から別の立場を絶対悪だと決めつけるのも、戦争そのものを絶対悪だと糾弾するのも易しい。しかし、誰しも己を静かに振り返れば、日々、道徳的な境界線上での綱渡りを演じてゐない者など一人もゐない。

まして、死を賭して何かを守らうとした精神の劇を裁くのは容易な事ではない。マクスウェル氏は両軍の戦闘の研究を通じてそこに気付いた。

日本軍の上層部が敗北を充分に認識した上で大勢の若者を神風特攻隊に任命したのは、絶望的な大義のために命を捧げた若者たちの倫理規範が、以後何千、何万年と、人々の自己犠牲精神を引き立て続けるであろうと考えてのことだった。彼らの最後の望みは、未來の日本人が特攻隊の精神を受け継いで、強い心を持ち、苦難に耐えてくれることだった。

現代を生きる私たちは、神風特攻隊という存在をまだ理解できないと拒否するのではなく、人の心を強く引きつけ、尊ばれるような側面もあつたということを理解しようと努めるべきではないだろうか。（24頁）

らも、驚くほどの勇敢さを見せた普通の男たちの物語である。」（同著日本語版『特攻』13頁。以下、ページ数は日本語版のもの）

この着眼は美しい。マクスウェル氏は、日本の特攻に對しても偏見を持つてゐない。「西洋文化において自殺は嫌われている（16頁）」が、これは比較的最近のこと、ギリシャ、ローマでは、ソクラテスやセネカの自殺は高いものだとされてゐる、名誉ある自決といふ思想——これは日本人の考へ方とさほど遠くない、彼はさう言ひます。

何をもって「正しい意志」「正しい死」とするのかを厳密に定義するのは困難だ。ワインストン・チャーチルは、ベルリン爆撃のニュース映像を見たとき、こう口にした。「我々は獸に成り下がってしまったのか」しかし、チャーチル自身も、戦争という行為の中で女性や子供を生きたまま焼き殺すことはやめなかつた。道德上の二線は、曖昧だ。（17頁）

この問ひは深刻です。なぜなら、私にもあなたにも、そして世界中の誰にも、完全に解くことは出来ない問ひだからです。勇気ある問ひ掛けだと思ふ。

道徳上の境界が何故曖昧かと言へば、人生がさういふ

ある。と云つて、誤解したマクスウェル氏を責めるつもりはない。我々日本人が、外に向かつて、自分たちの実像を、余りにも語らないことができたことが原因なのだ。要するに今述べた「お詫び文化」のもう一つの側面、「自分を説明しない文化」も又、世界で我々への誤解が積み重なる原因だった。

例へば、マクスウェル氏はこんなことを書いてゐる。

日本の真珠湾攻撃を合理的に説明するのは困難だ。神風特攻ともども、狂信国家が考えた非理性的な行動だと片付けてしまう方が、ずっとたやすい。（27頁）

大きな誤解ですが、恐らく、これは次のやうな天皇觀に原因があるに違ひない。

戦争前の憲法には、はつきりと、天皇は神であるといふ記述があった。（略）神と天皇は同一であり、国民にとって天皇のために戦うと言うことは神のために戦うということでもあった。（略）日本人は皆、天皇に関する言葉が発せられるときは必ず「氣をつけ」の姿勢をとつた。「氣をつけ」の号令は、これから天皇陛下の事を話すという合図だったのである。（44頁）

戦争前の憲法、即ち大日本帝国憲法には天皇が神だと

いふ記述はありません。ヨーロッパの立憲君主国の憲法の君主無咎責の単純な日本語訳への誤解です。そもそもこの憲法は当時のヨーロッパの立憲政体と日本の統治伝統の徹底的な比較研究に基いて制定されたもので、同時代の世界の学界からも高く評価されたものだ。「気をつけ」に関しても、世界中の軍隊が上官の指示で「気をつけ」の姿勢を取る、さういふ場合と変りません。日常で普通にある光景ではない。確かに戦時中、天皇崇拜と言はれても仕方ない異様な状況がある程度現出したが、それは二千年の歴史での数年に過ぎず、基本的に、日本の天皇は宗教的狂信の中核ではありません。天皇は、國や民の幸と平和を祈ること自体において、日本の中心に優しく座つてこられた。祈りの人だ。これもあへて注釈を付ければ呪術の人ではない、西洋人にも理解できる意味で、平和を祈り続ける存在であった。

天皇は、軍国主義や狂信とは凡そ対極的な、日本といふ国の母性を象徴する存在だった。天皇崇拜の狂信は、はれども仕方ない異様な状況がある程度現出したが、それは二千年の歴史での数年に過ぎず、基本的に、日本の天皇は宗教的狂信の中核ではありません。天皇は、國や民の幸と平和を祈ること自体において、日本の中心に優しく座つてこられた。祈りの人だ。これもあへて注釈を付ければ呪術の人ではない、西洋人にも理解できる意味で、平和を祈り続ける存在であった。

戦争に踏み切った理由について

更に、マクスウェル氏は戦前の日本社会についても大きな誤解をしてゐる。

日本の文化は相変わらず封建的で、自分の生き方を自分で決める事が出来る者などほとんどいなかつた。小川

は、民族的なアイデンティティ・クライシスを乗り越える試みだつた。

多くの日本の若者は、当時世界有数と目される、高度なりテラシーを持つてゐた。貧農の息子や工場労働者の娘が、難しい小説や哲学書を読むことが戦前の日本では当たり前に行はれてゐた。一九三〇年代、桑原武夫といふフランス文学研究者がアランに会ひに行きます。その時彼は、日本ではスタンダールの『赤と黒』の文庫本が十萬部売れたと話したら、アランは「信じられない。我が国ですらスタンダールの読者は数千人だ」と言つて頭から信じなかつたといふ。しかしこの数字に誇張はなかつたのです。

当時の日本人の多くは、政府が選んだ価値観しか学んだ事がなかつた。(略) 政府は、日本の生活のあらゆる側面を支配し、さらに全国民に対しても忠義と恭順を指針にするよう求めた。(略)

日本の支配層は、アメリカに関する情報をきびしく制限していた。(120頁)

ごく一時的な抑圧は別にすれば、一八七〇年代から一九四〇年にかけての日本の実態は、これとは全く違ひます。例へば、日本ではマルクス本人の著書さへ、一九二〇年代までは幅広く読まれ、論じられてゐた。

(筆者註：『特攻』に登場する特攻隊員) や彼と同年代の若者たちは個人としてのアイデンティティを確立する悩みとは無縁のまま自らの前に用意された人生を歩んでいた。(40頁)

日本は、一六〇〇年から始まる江戸時代にヨーロッパの近代に近い独自の発展を遂げ、身分制の中でも、個人の人生へのチャレンジ、自己表現の可能性の高い社会を実現してゐました。カナダ人女性のある日本学者は、「もし自分が十九世紀に生れたならば、富裕層ならロンズドンに、下層階級だったなら江戸に住みたいと思ふだらう」と書いてゐる。それだけ平等な福祉と、生活や自己実現の喜びが下層階級まで行き渡つてゐた。実際、さうでなければ俳句や歌舞伎のやうな庶民の藝術があれほど発達する筈がない。

その江戸時代末期、アメリカから軍艦が来航し、その他欧米列強が次々に圧力を加へる中、我が国は開国を決断します。

「アイデンティティを確立する悩みとは無縁」どころか、この時から日本人の民族的なアイデンティティは苦惱し続けることになる。

日本近代には、新渡戸稻造、岡倉天心、福澤諭吉、夏目漱石、森鷗外のやうに、同時代の欧米と同水準と言つていい著作が大量に書かれ、読まれたが、それらの多く

また、日本は、近代史を通じて、不思議なほど、アメリカに対しても好意を抱いてきた。近代初期の日本人たちは日本古来の英雄と並び、ワシントンをとりわけ尊敬してゐました。デモクラシーの父として、又、国民国家を建設した英雄としてです。

もつとくだけたところでは、日本人の野球熱を挙げてもいいかもしない。アメリカ初のプロチームが出来た一八六九年の早くも二年後、開国直後の日本に野球は伝はり、瞬く間に若者に人気のスポーツとなつた。用語もすぐ日に日本語に訳された。Baseballは野球、Hitterは打者、Picherは投手といふやうな具合です。その多くを明治時代を代表する俳句の天才正岡子規が作りました。正岡子規の俳句、例へば「柿くへは鐘か鳴るなり 法隆寺」のやうな作品は、あなたもご存知かも知れません。かうした戦前の日本が、天皇への狂信に凝り固まり、アイデンティティの葛藤と無縁の原始的な心情を持つ未開國家だつたと考へるのは、余りにも不自然でせう。

要するに、天皇崇拜の未開で狂信的な民族が、日米戦争で破れた結果、文明化したといふイメージは事実と程遠い。

逆に、今書いたやうな、民度の高い、文化的な好奇心の抜群な民族が、国力差が二十倍以上もあるアメリカと戦争をしたのはなぜか、さう問ひを立てて、日米史を見直していただきたい。

そもそも、日本が当時進出してゐたのは、主に、朝鮮半島から満州にかけてです。そして、その最大の理由は、中国大陸の政権が非常に脆弱で、欧米列強の進出が、我が国にとつて脅威だつたこと、もう一つはロシアの南下が恐ろしかつたことの二点です。

我が国は資源の無い、国土の小さな島国だ。しかもASEANやヨーロッパのやうな地域共同体を形成してゐない。大変孤独な民族です。過酷な帝国主義競争の中、我々が欲したのは安定した資源と欧米列強から侵略されないといふ二つの条件であり、それを求めて大陸に進出した。

しかし、戦前日本の北方への進出から、何故よりによつて日米戦争が起きたのか。中国大陸やシベリアとは正反対の方角のアメリカと、なぜ日本は戦争しなければならなかつたのか。

一言では言ひ表せませんが、当時のアメリカの中国利権への野心、ヨーロッパでのドイツ勝利を防ぐために枢軸国である日本を叩く必要、また、日本が大国化してアメリカの脅威になる前に叩くといふ予防措置——かうしたアメリカ側の戦略がそこに介在してゐ、一方で、我が国の外交政策の拙劣、また今に統く「国際社会で自分を説明する努力の極端な欠如」によつて、アメリカの不信と誤解を招き、戦争を招來した。これはあまりにも駄足の説明ですが、大筋では間違つた理解ではないと思ふ。

そしてアメリカの知識人に案外な程見えてゐない歴史の一側面です。

今、日米両国は、アジアの永続的な平和のために、強固な同盟を結び直さねばなりません。そのためには、日本が、これ以上、「国際社会で自分を説明する努力の極端な欠如」の中に閉ぢこもり、「お詫び文化」を繰り返してはならないと、私は考へます。

あなたが仰つたやうに日米間は「強固な関係」だからこそ、「お互いの立場の違いについて正直に話し合」ふことが、本当に必要だ。日本は、自分を説明する努力に、もつと重ね、誤解に誤解をぶつけながら、それを昇華させて新たな友情に達する位の覚悟がなければ、日米両国民は前に進めないのでないかと考へます。
この手紙はささやかで拙いものではありますが、その試みです。
私の言葉に無条件に賛意が欲しいのでは勿論ありません。
言葉が届くこと。それがどのやうな波紋を生むかを、言葉の外側の条件ではなく、言葉そのものの力に委ねること。——文学者である私は、自分の筆の拙さを嘆きながらも、さういふ意味で、私の言葉があなたに届くことを強く希望してゐます。

産経新聞出版の雑誌です



好評発売中!

地デジBS・CSケーブル・スカパー!全84局、番組解説数(写真付き)685作品!

特別定価390円
(本体371円)

春の新ドラマ 先取り特集!

編集部イチオシ番組

木村拓哉の宮本武蔵に注目!
今季メジャーでの活躍を占う
田中将大の初登板を見逃すな!

大人のための「見やすい番組表

政府の消費増税対策で上がる株銘柄

ネットマネー

月刊

買取余力は148兆円!
先回り投資で大儲け!

外国人買い 再出撃株 199銘柄

株主優待
得裏ワザ50連発!

特別定価700円
(本体667円)

好評
発売中!

「ネットマネー」4月号

特別定価700円
(本体667円)

増税に負けない 資産を強化する マネー情報誌

ネットマネーの1年定期購読は
2冊割引でおトクです!

※送料は無料です。

お申込みはセブンネットショッピングへ
※3年購読キャッシュは2014年2月20日入金
受付分まで終了いたしました。

お申込みは以下へ

●フリーダイヤルからのお申込み0120-255-803
平日10:00~17:00(平日13:00~17:00)
※携帯電話、定期購読開始号などご案内します。

土日祝は利用できません。

●インターネットからのお申込み
<http://www.7netshopping.jp/magazine/>

2014年 NHK大河ドラマ

「軍師官兵衛」完全読本

好評発売中!

定価: 本体1000円+税



発行: 産経新聞出版 発売: 日本工業新聞社